

二人芝居 「ろう教師の嚙矢・吉川金造の生涯」

現代ろう者役・井崎哲也 吉川金造役・那須英彰

119年も前に日本で初めてろうあ教員が誕生。その名は「吉川金造」。明治16年、11歳の時に楽善会訓盲院に入学、俊才のまま明治26年母校の教員に就任した。明治33年4月より豊橋盲啞学校へ転出。ろうあ者同士の結婚を日本初に成し遂げた。しかし、大正に入ると口話教育の普及でろうあ教員が減少したが、最近では再びろう教員が増加、手話も見直されている。

吉川金造は天国から眺めながらさぞかし喜んでいることでしょう。井崎&那須コンビがあこの時代にタイムスリップして、「吉川金造の生涯」を芝居でコミカルに再現する。

ある日、井崎哲也という現代のろう者が客席の後ろからやって来て舞台上上がった。カッコイイ帽子をかぶりブラブラ歩いては、丘の上にある公園に登って景色を見降ろすと、たくさん家が建ち並んでいた。ちょっと疲れたのでベンチに座って休憩していた。



すると、急に雲ゆきが怪しくなり、突然雷が鳴り光り、嵐に巻き込まれてまっすぐ立てなかった。グルグルと巻き込まれたが、やっと止んだ。

しかし、さっき見た景色が違っていった。回りがどうも古い家ばかり、ビルが見られない。

井崎「なんでだろう？」

訳がわからなくてベンチに座った。

そこにトボトボと歩く前屈みのお爺さんがやって来て、ベンチで井崎の隣に座った。しばらくして、井崎がお爺さんに手振りで話しかけてみた。

井崎「あの、私は耳が聞こえないんですが…」

と言って、筆談のメモを取り上げたら

吉川「おお、君もろう？わしもろうだよ」

井崎「貴方もろうでしたか。同じろう者に出会って運がいい」

そして

吉川「貴方の名前は？」

井崎「私の名前は井崎。『井』と『崎』」

の手話と指文字で答えたが、

吉川「ん？指文字がわからない」

と言うので、改めて

井崎「いぎき」

のひらがなの字で表した。

吉川「わしはよしかわ」

とひらがなで空書した。漢字で「吉川」と言う。

吉川「わしの名前は横浜の手話と同じ。みんなあだ名があるように手話にもあだ名がある。横浜生まれだからちょっと違うが、名前は横浜のような手話で表すことになっている」



そこで

吉川「貴方は何にして来たの？」

井崎「私は東京からこの公園へ来て、景色を眺めているところです。同じろう者に会えて嬉しいです。よろしくお願いします。横浜ですね」

井崎がヨットの形をしたみなどみらいのホテルを表すと

吉川「横浜にヨットの形？？とにかく、わしは卒業した母校の祝賀会行く前に〇〇へ寄ります」

井崎「〇〇？スタンプを押す？」

二人とも同じろう者なのに、手話のやりとりが合わず、観客から爆笑。



吉川「違う。手紙を書き、封筒に入れて郵便局へ出しに行くのです。だから消印を押す所が郵便局の手話です。貴方はどうやって表すのですか？」
井崎はやっとわかって

井崎「ああ郵便ですね。ポストに入れますね」
しかし、吉川は郵便という現在の手話おろかポストそのものを知らない。

吉川「だから郵便局へ寄った後、母校の祝賀会へ行く前に、この公園で一息しているところです」
井崎「そうでしたか。すみません。ところで貴方は一見古い手話のようで、失礼ですがお歳は？」

吉川「いや、貴方が先に名乗るべきでしょう」
井崎「私は昭和27年生まれ、今は平成23年です」

しかし、吉川は「昭和27年」と「平成」の手話が理解できず、頭を抱えていた。また「わからない」の手話は同じようだが、振り方も違っていた。井崎が「平成」を漢字で表しても

吉川「平成？こんなデタラメを言うな」
井崎「デタラメ？今の手話はこうしているんです」

こうして、昔と今の手話がかみ合わない様子にまた、観客から爆笑。
井崎「とにかく天皇がお亡くなり、昭和から平成に変わっているんです」

吉川「昭和は同じだが、天皇が亡くなったの？今はまだ昭和10年だよ」
井崎「えっ！今が昭和10年？」

井崎がビックリして、リュクサックから新聞を取



り出して吉川に見せる。今日の新聞を見せても、疑いもって首をかしげる吉川に井崎が驚いて
井崎「貴方は昔から来た幽霊では？」
吉川「いや、君こそイカレている」

そう言われた井崎は回りを見渡しても、現代の景色とは違うとわかり、ショック状態であった。井崎「すみませんが、貴方のことを話してもらえませんか？」

少し話しかけてもらっているうちに、井崎は自分がさっきの嵐に巻き込まれて、昭和10年へタイムスリップした事を知ってしまった。しかも目の前に座っている人は、日本のろう界で有名な歴史上の人物「吉川金造」であることを知った。

大変いい機会なので、吉川金造の生涯を語ってほしいとお願いしたら、吉川は祝賀会へ行くまでに時間があるからいいよと引き受けてくれた。

吉川は立ち上がって、バックのスクリーン画面に向けて、自分の顔写真が出て、ビックリ。
井崎「これは現代の機械で映せるんです」

昔と現在ごっちゃ混ぜの舞台だが、便宜上芝居だからお許しいただきたい。そして吉川は画面を追いながら、自分の人生をとつとつと語り始めた。



吉川金造の生涯

誕生 明治4年6月25日 神奈川県横浜市長者町生まれ。

当時は下駄をはき、着物に帯を結んでいた。

7歳 明治12年4月18日 横浜市旧永井小学校に入学した。周りは聴者で私一人だけろう者だった。聴者の口を真似してしゃべったけど、声が変わってみんなに笑われていじめられた。

11歳 明治16年3月 横浜市旧永井小学校書法科を専修し卒業して、4月から東京・築地の楽善会訓盲院(筑波大学附属聾学校の前身)に入学した。昔の築地という手話は勝鬃橋の形で表わした。
井崎「築地といえばマグロが並ぶ魚市場だね」

吉川「魚市場？そんなのないよ。築地は勝鬨橋に行き交う船じゃのう」

当時、日本橋河岸にあった魚市場は関東大震災に被災されて、現在の築地に移転された。

両親が心配して医者に診てもらったら、耳が聞こえないとわかり、築地にある盲・聾の学校に入学を薦められた。

横浜から汽車に乗り、新橋から人力車に乗って築地まで通った。汽車と新橋の手話が違っていた。

横浜から通うのは遠いので、訓盲院の寄宿舎で暮らした。当時の教育は口話法ではなく手話法が中心であった。教師は皆手話で教えた。



14歳 明治19年5月16日、伊沢修二先生宅に行き、伊沢先生より「視話法」の指導を受け、発音が出来ようになった。

18歳 明治22年7月30日東京盲聾学校聾生尋常科、技芸科図画科を卒業したあと、9月11日 東京盲聾学校より模範生として聾正尋常科助教を命ぜられた。

明治23年6月～9月 東京盲聾学校校長伊沢修二はアメリカへ渡航して、電話発明の有名なアレキサンダー・グラハム・ベル博士から視話法を学び、口話法を取り入れ、口話教育が行われるようになった。「アメリカ」の手話は鼻が長いと表す。

何も口話法ばかりでなく、口話のできない生徒は手話法で学んだので、生徒それぞれに合わせた。

吉川の説明を受けるうちに、井崎は昔の手話がわかるようになってきた。



吉川「東京盲聾学校校長小西信八先生という方は自分の人生の中で最も尊敬でき、恩義ある方。すごく感謝している」

長州の藩士、山尾庸三氏という方も、幕末に伊藤博文らと密航して、イギリスのグラスゴーの造船所で手話を使いながら働いている聾者に会い、一般と変わらぬ働く様に感銘を受けて、日本に盲聾教育を取り入れるよう、新政府へ建白書を出しては奔走した。やっと明治13年に楽善会訓盲院を開校させた。当時は学制公布から疎外されて、通えなかった聾児でも学校へ行けるようにと、探し集めていると支援した。

昔の手話「山尾」はこうだが、井崎が「山」＋「尾」を表すと

吉川「シッポの尾？失礼な！」と怒った。

訓盲院の立派な校舎は、鹿鳴館の設計でイギリスの有名な建築家コンドル氏であった。

19歳 明治24年12月、高木慎之助・片桐定吉とともに東京盲聾学校同窓会創立発起人となる。

初代会長は江戸時代生まれの片桐定吉。

井崎は吉川が同窓会創立発起人を知ると

井崎「この間、母校創立120周年記念祝賀会が盛大に行われました。同じ同窓生であり、先輩の貴方と後輩の私がこうして、脈々とつながっていたとは大変感慨深いことです」

大先輩におじきする井崎だが、吉川は現在の手話がわからず神秘的顔をしていた。手話が通じないもどかしさに苛立つ井崎。ともかく吉川はスクリーンの画面を再び説明する。

21歳 明治26年3月31日、東京盲聾学校図画科教場助手を命ぜられる。

明治26年5月、「東京盲聾学校聾生同窓会報告」創刊号を発行。

ここにも同じ母校でも「附属」と「官立」の表現が違っていたので、井崎は当時の「官立」に従う。その間に日本画に優れた横江栄雄氏を紹介。吉川から「自慢」の手話表現がしばしば出るが、「良い」とか「素晴らしい」という意味である。

明治28年 東京盲聾学校同窓会副会長となる。

26歳 明治30年 東京盲聾学校同窓会会長となる。

27歳 明治31年 東京盲聾学校聾生同窓会報告発行。

11月 アレキサンダー・グラハム・ベル博士来日。

この人は盲と聾を区別にして、聾学校を建てるべきだという考えを提唱していた。小西信八校長もこの意見を取り入れ、明治43年に盲・聾学校

を分離して、東京聾唖学校に改称した。

ベル博士来日の記念写真に、教員や児童生徒一人一人の名前を吉川が説明する。



28歳 明治33年3月まで同窓会会長を務める。
3月 豊橋盲唖学校（前身が愛知県蒲郡市の捨石訓唖塾）から教員赴任の要望あり、小西校長の薦めで転勤に決意して、東京盲唖学校盲唖学校を退職。仲間らと送別会を開く。
4月 豊橋盲唖学校へ奉職。ろう者だけの創立学校は全国の中で捨石訓唖塾だけ。他の学校は盲児と聾児が一緒の盲唖学校。
29歳 明治34年、小西校長から薦めで母校後輩の相原八重さんと結婚。

当時は聾者同士で結婚することは許されておらず、考えられなかった時代であった。ろう者同士結婚第一号であったと言われている。



明治35年 長男 明治36年 次男誕生。
48歳 長男肺炎で死亡 52歳の時に次男死亡。
明治45年 八重夫人病死 享年39歳。
46歳 大正6年 豊橋盲唖学校の卒業生鈴木志げさんと再婚。
48歳 大正9年3月 私立豊橋盲唖学校辞職。
翌月4月 三重盲唖院へ奉職。三重盲唖院は給与待遇がいいから転勤したため。
大正7年 日本聾唖協会中京部会設立を通して、岡崎盲唖学校の聾教師桑子勤治を知り合い、交友になる。昭和4年 奈良県吉野山にて初めて日本

聾唖教員協会第1回研究会を行う。

井崎から豊橋・三重・岡崎・東京、人名の三浦浩・小岩井是非雄・横尾義智・藤本敏文など現代手話が出たが、
吉川「わざわざ2語以上表現するのではなく、1語で表現するように」と諫めた。

昔の手話は1語で済みますが多く、大変簡潔かつ合理的であった。2桁数字も現代と表現が少し違う。
吉川「特に藤本敏文は京都の聾学校に入学、教師になり、島根・広島 of 聾学校を経て、官立東京聾唖学校教師範科に入り、教員免許を取って広島・大阪へと奉職した」と説明した。



60歳 昭和6年10月 私立三重盲唖学校を辞職。還暦60歳。退職送別会を盛大に行う。慰安会の記念写真に参列の左側は手話法の教員、右側は口話法の教員でくっきりと分かれていた。

大正時代から口話教育普及を推進した西川吉之助、川本宇之助、橋村徳一氏の活動で口話教育が普及するようになり、手話教育は徐々に禁止になった。そのために聾教師は次々とやめて行ってしまった。

昭和8年になると、鳩山一郎文部大臣の訓示で、口話法が主流となり、全国に広まった。

67歳 子供は5人生まれたが、生きていたのは二女艶衣が一人だけ。

昭和14年3月23日 初孫、艶衣の長男誕生。昔の孫の手話も1語表現であった。

その後1ヶ月経たないうちに
4月11日 滋賀県大津市にて逝去。享年67歳9ヶ月。

井崎「これで貴方の人生は終わりですね」
吉川「終わりの手話？わしはこう表すじゃのう」
井崎に昔の手話を教えた。

自分の人生を語り終えた吉川は、用事の時間になったので、出かけなくてはならない。
吉川「じゃあ、改めて貴方の名前は？」

井崎「井崎です。忘れないでね」
吉川「また2語表現か。うん、わかった」
井崎「いろいろと教えてくださってありがとうございました。では握手をお願いします」
吉川「握手？貴方は外人か？」
井崎「いいえ、今は挨拶が握手になっています。また、いろいろな国のろう者との交流が広がっています。昔はアメリカと戦争をして原爆が落ち、日本は負けました。でも、今は仲良くしています」
吉川「原爆とは何？」

吉川は昭和14年に亡くなったから、第二次大戦や原爆を知らないのは無理もない。
井崎「飛行機から落ちる普通の爆弾でなく、とてつもなく大きな爆弾。これが原爆です」と大きな爆弾の形を表した。

しかし、吉川は原爆の存在とその意味がわからず、頭を抱えていた。

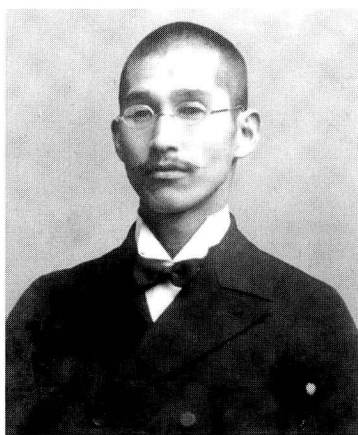
吉川「まあ、これで別れましょう」
この場で井崎と別れて、トボトボ去って行った。

その時、井崎は再び嵐に巻き込まれ、タイムスリップして現在に戻った。現在の景色に戻ったが、

吉川がいないことに気がつき、
井崎「偉大なる吉川金造さんのサインをもらえばよかった」
と後悔したが、
井崎「あっ、研究会の時間が迫ってきた。急がなきゃ」

さっき、出会った吉川金造の面影をもう一度見直し、急いで帽子をかぶり、リュクサックを担いで公園を後にした。

— 終 —



吉川金造氏



吉川金造先生年譜

(敬称略)

| 時期 | 年齢 | 吉川金造先生の経歴等 | 期間 | 関連する情勢 |
|---------------------------------------|-----|---|---|---|
| 《明治》——— 元年(1868) | | | | (1868)明治維新 |
| 4年(1871) 6月25日 | 0歳 | 横浜に生まれる。(横浜市長者町3丁目) (現在の横浜市中区長者町) | ↑ 横 浜 時 代 (11年間) ↓ | (1875)京都訓盲院設立 伊澤修二米国留学 「視話法」習う (1880)私立楽善会訓盲院 設立(築地) (1880)ミラノ国際会議(口 話法へ転換) |
| 6年(1873) | | (幼年期は横浜で過ごす) (相原八重誕生) | | |
| 12年(1879) 4月18日 | 7歳 | 横浜市旧永井小学校へ入学。 | | |
| 16年(1883) 3月 1日 | 11歳 | # 小学校書法科を専習し卒業。 # 卒業にあたり、第二席で優等賞を受ける。 | | |
| 16年(1883) 4月12日 | 11歳 | 築地の訓盲院に入学。(私立楽善会訓盲院 現在の筑波大学附属聾学校の前身) | ↑ 東 京 時 代 ↑ (3年 間) ↓ (17年間) ↑ | (1886)小西信八東京訓盲 院係となる (1887)訓盲院から東京盲 哑学校になる (1890)伊澤修二東京盲哑学 校校長となる (1890)小西信八東京盲哑学 校校長となる |
| 17年(1884) 4月17日 | 12歳 | 日本画南宗派を学ぶ。 | | |
| 19年(1886) 4月12日 | 14歳 | 狩野派を学ぶ。 | | |
| 5月16日 | 14歳 | 小西信八先生に伴われ伊澤修二先生宅に行き、 伊澤先生より「視話法」の指導を受け、発音が 可能となる。 | | |
| 7月29日 | 15歳 | 私立訓盲院を5か年で卒業する予定のところ 文部省の直轄となり哑生尋常科第三年級、同技 芸科第二年級、同裁縫科第四年級に編入した。 | | |
| 20年(1887) 3月15日 | 15歳 | 明宮殿下より図画を誉められ金の鉛筆挟を下賜 | | |
| 22年(1889) 7月30日 | 18歳 | 東京盲哑学校哑生尋常科、同技芸科図画科を卒 業。(第2回卒業生) | | |
| 9月11日 | 18歳 | 東京盲哑学校より模範生として哑生尋常科助教 を命ぜられる。 | | |
| 24年(1891) 1月 7日 | 19歳 | 皇后陛下が東京盲哑学校新築落成式に行啓の際 生徒総代として口上にて祝辞を述べる。後に、 図画を奉呈したところお菓子の下賜を受ける。 | | |
| 12月16日 | 20歳 | 東京盲哑学校同窓会設立発起人となる。 同窓会編集委員となる。 | | |
| 25年(1892) 8月 7日 | 21歳 | 宮城県で開催の国家教育社第二回大集会で二週 間の夏期講習会が行われ、「視話法」の講師助 手を務める。(伊沢社長に招かれて) | | |
| 26年(1893) 3月31日 | 21歳 | 東京盲哑学校図画科教場助手を命ぜられる。 月俸金5円) | | |
| 26年(1893) 5月 | 21歳 | 同窓会会誌「東京盲哑学校哑生同窓会報告」創 刊号を発行。 | | |
| 28年(1895) 20年~32年 (1887)~(1899) | 23歳 | 東京盲哑学校同窓会副会長となる。このころ、 小西信八校長と全国の教育会場を回り、聾哑者 の発音が可能なことを実証してみせる。 | | |
| 30年(1897) | 26歳 | 東京盲哑学校同窓会会長となる。(豊橋に来る まで) | | |
| 31年(1898) 11月 | 27歳 | A, G, ベルに会う。(東京盲哑学校で) | (1898) A, G, ベル来日 伊澤修二の通訳で講 | |

| 時 期 | 年齢 | 吉川金造先生の経歴等 | 期間 | 関連する情勢 |
|---------------------|-----|--|---------------------------|---|
| 32年(1899) 6月 | 28歳 | 帝国教育会で伊沢修二氏より発音「視話法」科の助手を命ぜられた。 | (併 8年) 東京時代 (17年) | 演会を行う。 (1898)成瀬文吾上京(小西校長と親交) " 拾石訓唾義塾開校 (成瀬文吾校長) |
| 33年(1900) 3月 | 28歳 | 同窓会会長辞任。 | ↓ ↓ | |
| 3月16日 | 28歳 | 東京盲唾学校より職務格別勲励に付き賞を受ける。 | | |
| 3月 | 28歳 | 東京盲唾学校辞任。 | | |
| 3月31日 | 28歳 | 東京盲唾学校退職に付き同校長小西信八より各県講習会等へ同伴した記念に蒔絵硯箱と感謝状を贈られた。 | | |
| 4月18日 | 28歳 | 愛知県宝飯郡塩津村拾石訓唾義塾教員たることを愛知県知事より認可を下付せられた。 | ↑ | (1900)私立豊橋盲唾学校 (豊橋市札木町) |
| 4月20日 | 28歳 | 拾石訓唾義塾を改称した私立豊橋盲唾学校より月俸金12円を給与された。 | | |
| 34年(1901) 4月 | 29歳 | ◎相原八重(東京盲唾学校卒業生)と結婚 (5人の子供出生、内4人は死去) 豊橋盲唾学校同窓会(聾啞部同窓会)を設立。 (卒業予定者の山田、小山、白井氏らを指導) (「梶友会」設立) | 豊橋時代 (21年) | (1901)伊澤修二来豊 (1901)校舎移転(豊橋市中八町) |
| 35年(1902) 2月18日 | 30歳 | ◎長男鍾一誕生 | | |
| 36年(1903) 12月12日 | 32歳 | ◎次男鍾美誕生 | | |
| 39年(1906) | 35歳 | 日本聾啞者大会で議長を務める。 | | |
| 40年(1907) 2月20日 | 35歳 | 豊橋盲唾学校創立以来格別職務勲励功勞に付き同校より感謝状と賞金を贈与せられた。 ◎3男鍾三誕生 | | |
| 41年(1908) 5月2日 | 36歳 | ●長女艶重子死亡 | | (1908)校舎移転(豊橋市花田町) |
| 42年(1909) 1月26日 | 37歳 | 文部大臣から選奨。文部省より多年聾啞教育の発達に尽力功勞少なからずとして賞を受ける。 | | |
| 6月6日 | 38歳 | 文部大臣選奨の表彰・祝賀会(豊橋市八町高等小学校において)(豊橋市教育会主催) | | |
| 9月22日 | 38歳 | ◎次女艶衣誕生 | | |
| 11月9日 | 38歳 | ●3男鍾三死亡 | | |
| 43年(1910) 8月13日 | 39歳 | ●父庄吉死亡 | (1910)東京聾啞学校となる (盲聾分離) | |
| 44年(1911) 月24日 | 40歳 | 同窓会設立20周年記念祝賀会・臨時会にて表彰状と記念品を受ける。 | | |
| 45年(1912) 6月 | 41歳 | ●八重夫人豊橋にて病死。(葬儀：豊橋市龍拈寺にて。横浜市神奈川区青木町の吉川先生の亡父の墓の側に埋葬)(享年39歳) | | |
| 《大正》 | | | | |
| 6年(1917) 9月15日 | 46歳 | ◎志げ夫人(豊橋盲唾学校卒業生)と再婚 | | |
| 8年(1919) 1月7日 3月 | 47歳 | ●4男正邇死亡 豊橋盲唾学校創立第20周年記念式挙行の際、20年間勤続を祝賀し表彰される。 | | (1919)三重盲唾院設立 |

| 時期 | 年齢 | 吉川金造先生の経歴等 | 期間 | 関連する情勢 |
|------------------|-----|--|-------|----------------------|
| 9年(1920) 3月 | 48歳 | 私立豊橋盲啞学校辞職。 | ↓ | |
| 9年(1920) 4月 1日 | 48歳 | 三重県慈善協会会長より三重盲啞院啞生部教員の囑託を命ぜられる。 | ↑ | (1920)名古屋聾啞学校純口話法を実施 |
| 4月 5日 | 48歳 | 豊橋盲啞学校より創立以来職務勉勵功勞に報いる為として金百円、三重盲啞院に転任に付き送別記念に鉄瓶を贈られる。 | ↑ | (1920)校舎移転(豊橋市旭町) |
| 5月17日 | | 帝国教育会より表彰される。会長文学博士沢柳政太郎より多年教育に従事した功績により賞状と帝国教育会功牌を贈与せられた。 | ↑ | |
| 9月21日 | 49歳 | ●長男鍾一死亡 | ↑ | |
| 10年(1921) 4月 1日 | 49歳 | 三重盲啞院を改称した私立三重盲啞学校より月俸金45円を給与せられた。 | ↑ | (1919)私立三重盲啞学校となる。 |
| 7月24日 | 50歳 | 東京盲啞学校、私立豊橋盲啞学校卒業生合同の主催で明治26年4月1日より大正7年3月31日まで満25年勤続を祝賀し、東京聾啞学校で開かれた全国聾啞教育会を好機として表彰式に招かれ、記念の時計を贈られた。 | (11年) | |
| 12年(1923) 10月31日 | 52歳 | ●次男鍾美死亡 | ↑ | (1923)関東大震災 |
| 11月 4日 | | ●弟死亡 | ↑ | |
| 13年(1924) 4月21日 | 52歳 | 公立私立盲学校及び聾啞学校規程により聾啞学校教員たることを認可せられた。 | ↑ | |
| 14年(1925) 3月31日 | 53歳 | 県立移管に伴い教諭に。 | ↑ | |
| 15年(1926) 2月 2日 | 54歳 | ●母マツ死亡 | (11年) | |
| 《昭和》 | | | ↓ | |
| 6年(1931)10月 | 60歳 | 還暦を期して私立三重盲啞学校を辞職。 | ↓ | (1929)艶衣滋賀聾話学校 赴任 |
| 7年(1932) 3月20日 | 60歳 | 吉川金造氏慰安会。名古屋市立盲啞学校講堂にて。 | ↓ | (1933)校舎移転(豊橋市鍵田町) |
| 11年(1936) 8月 | 64歳 | 日本聾啞協会三重支部設立 | ↓ | |
| 11年? | | 大津市に転居 | ↑ | (1933)恩師小西信八逝去 |
| 14年(1939) 3月23日 | 67歳 | ◎初孫(末女艶衣さんの長男=初孫)誕生 (艶衣さん:滋賀聾話学校の先生を勤める。昭和4~14年) | ↑ | |
| 4月11日 | 67歳 | ●逝去(大津市にて)[大津での住所:大津市膳所町大字錦512) (67歳9か月の生涯を閉じる) | ↑ | (1940)私立豊橋盲啞学校口話法を実施 |
| 12日 | | 告別式(大津にて) | ↑ | |
| 5月 6日 | | 埋葬式(横浜市神奈川区反町浄瀧寺吉川家墳墓) (※現横浜市神奈川区幸ヶ谷町) | (4年) | (1941)太平洋戦争に突入 |

◎慶事 ●弔事

※平成10年(1998):吉川金造先生、生誕127年、没後60年

参考文献 「聴覚障害教師の嚆矢 吉川金造先生」 編著者・市橋詮司